

集約的な放牧を取入れた全期粗飼料多給肥育技術

(畜試 肉牛部)

1. 背景とねらい

短角牛肉の産直が定着化し、出荷頭数も年々増加して昭和63年度は出荷頭数の47.6%を占めている。しかし、この品種はまき牛繁殖という独特の繁殖形態が主流で、牛肉の通年供給が難しく大きな課題となっている。

そこで、端境期対策さらには濃厚飼料節減をはかり安定した経営を図るため、放牧を組入れた全期間濃厚飼料制限肥育技術を検討したので参考に供する。

2. 技術の内容

飼養マニュアル

	舎飼育成期	放牧期	仕上げ期	通 算
月 齢	8	14	19	25
期間(日)	185	160	180	525
体重(kg)	230	360	460	630
D G	0.70	0.60	0.95	0.76
1 kg増体 当りTDN	6.01	(10.47)	8.15	(8.66)
1日当り 給与量 (kg)	大豆粕 0.6 コーンサイレージ 19.2	生草(49.2)	配合飼料 5.5 コーンサイレージ 19.1	大豆粕 111 配合飼料 990 コーンサイレージ 6,990 生 草 (7,872)

1) 素牛導入

十分に放牧育成した素牛を選び、過肥のものは避ける。7ヶ月齢で体重170kg 体高98cmのもので十分であるが、肢腰が強く体重の揃ったものを選ぶ。

2) 舎飼育成期(11~4月)

D Gの目標は0.7kgとし、サイレーズを飽食させ育成する。コーンサイレーズの場合は、D C Pの高い大豆粕(0.6kg/日)をグラスサイレーズの場合は、濃厚飼料

(1.5kg/日)を補給する。

3) 放牧期(5~10月)

濃厚飼料は無給与で昼夜放牧する。入牧直後は一時的に体重が5~10%減少するので、馴致放牧、早目の転牧が有効である。春及び秋期は0.7~0.9kgの増体が期待できるが、梅雨後期及び夏期は0.4~0.6と低下する。底陰林の設置、外部寄生虫の駆除を施し夏期の体重減少を極力避ける。

春期は肥育牛先行、繁殖牛後追い放牧をとり入れ草地を短草状態にして常に放牧肥育牛が栄養価の高い再生草を採食させるようにする。

4) 仕上げ期

1番草出穂期のグラスサイレージあるいはコンサイレージなどの良質粗飼料を出荷時まで多給し濃厚飼料を制限給与する。460kgから仕上げ体重に達するまでに良質サイレージ3,170kg(現物)、濃厚飼料990kg必要とする。出荷体重の目標は630kgとするが24ヶ月齢体高が130cmに満たないものは、580~600kgで屠殺する。

5) 経済性

枝肉1kg当り生産コストは1,311.6円となり、濃厚飼料多給肥育の1.5%コスト高となる。また、1頭1年当り所得額は31,370円である。

年間所得額が濃厚飼料多給型と同額となるのは、放牧料が180.5円あるいは濃厚飼料単価が45.6円の場合である。

3. 指導上の留意事項

1) 素牛は放牧育成されたものを導入する。

2) 粗飼料は刈取時期、調整方法により品質に差があるので、成分分析をするとともに、月1回は体重測定を実施し、目標DGが得られない場合は、フスマ等を補給する。

3) 濃厚飼料多給型、前期粗飼料多給型および既存の2シーズン放牧肥育(仕上げ期濃厚飼料多給)と比較し、濃厚飼料量がそれぞれ1,927kg、1,531kg、702kg節減出来る。

4) 肉質の等級は濃厚飼料多給型と同程度のA-2が期待できる。ただし、BCS及びBFSは高い値となる。

5) 放牧肥育は濃厚飼料多給肥育や前期粗飼料多給肥育と比較し、現状の濃厚飼料価格の中では所得が低いので、周年出荷をめざす生産者組織の中でリスク負担等対策を講ずる必要がある。

4. 関連試験課題名

草地を基盤とした2シーズン方式による寒冷地型肉用牛生産技術の確立。

5. 参考資料

岩手県畜産試験場成績概要書(昭和61~63年度)

昭和63年度指導上の参考事項(先行・後追放牧方式による肥育素牛の生産技術)